

秋になると、銀杏いちようや楓かえでの葉が、黄色やくれない色に染まり、あたりの風景を彩っていきます。色づいた葉は、やがて、枝を離れゆっくりと地面に落ちていきます。

落ち葉は、「いのちの終わり」に喩たとえられます。枝から離れ落ちていくさまは、孤独で寂しいものとして私たちの目に映ります。

しかし、見方を変えてみれば、違うありようが、うかびあがってきます。

落ち葉は、地面に落下した後、朽くちていきます。朽ちるといって、とても悲しい印象を受けますが、それは同時に、雨や風、微生物などはたらきによって分解され、やがて大地に帰っていくことでもあります。さまざまなはたらきによって、落ち葉は、大地に形を変えてゆくのです。

すべての存在は、変わり続けます。青々としていた葉が、やがて色づき、枝から離れ、地面に落ちていくそのさまは、存在は変わり続けるということたんできを、端的にあらわしているといえるでしょう。

大地に形を変えた落ち葉は、今度は、もといた木とつながっていきます。落ち葉は、大地に帰り、木の養分となるのです。それだけではなく、大地の恵みを受けるさまざまな「いのち」とつながっていきます。

落ち葉は、朽くちて終わりになるのではなく、形を変え、「いのち」のつながりの新しいひとつの点となるのです。

つながるということは、お互いに支えあうということです。

一見いっけん、孤独で寂しいものとして私たちの目に映る落ち葉は、変わり続ける存在のありようをあらわし、さまざまな「いのち」とのつながり、支えあいを、私たちに語りかけてくるのです。

秋の一日、降りしきる落ち葉を眺めながら、思いをめぐらしてみてください。孤独で寂しい光景ではなく、広く豊かな世界が、そこに立ちあらわれてくるでしょう。